

## 哲学カフェ実施報告

テーマ：子どもにとってお手伝いは仕事か

開催日：2018年5月13日（日）

開催内容：

今回は、「子どもにとってお手伝いは仕事か」をテーマとし、当日は、マザーズガーデン「あすなろ」と本学教員などの大学関係者の親子7組を含めた約25人が参加しました。

「どのような家事なら手伝えると思うか」という質問に対して、子どもたちから、「風呂洗いは手伝える」、「布団の上げ下ろしは重いので手伝いたくない」、「習い事があるときは手伝いたいとは思わない」、「皿洗いはできるようになった方がいい」など、さまざまな意見が出ました。そのような意見に対して大人から、「家事は誰の仕事だと思うか」という質問が投げかけられ、対話は徐々に哲学的な方向に広がりました。

「家族全員の仕事」、「家族の一員として、協力して当たりまえのこと」という意見に対して、「我が家では子どもに家事を手伝わせていない」、「家事は母親の仕事」、「子どもには勉強と部活を精一杯やってほしい」という意見や、「役割をはっきり決めずに、なんとなく自然に役割分担ができていくことが理想」など、さまざまな意見があがりました。そこから、「そもそもお手伝いは誰のためにするのか」という論点が浮かび上がり、「子ども本人のため」、「将来の自分のため」、「生きる知恵」という意見が大人と子どもの双方からあがりました。

しかし、対話を進めていくうちに、「自分で必要に迫られて『やらないといけない』と思った時点で、それはもうお手伝いではない」、「お手伝いとは他人のためにすることであって、自分のためだったらそれは仕事である」という意見が出て、「お手伝い」とは何かという疑問が浮かび上がりました。そこから、「お手伝いは本人のためなのか」、「困っている人を助けることではないのか」、「本人が『やり甲斐』を感じれば、それはすでに『お手伝い』ではなく『仕事』なのではないか」など、活発な意見を交わしました。

また、「部屋を散らかしたら誰が片づけるのか」、「そもそも部屋を片づける必要があるのか」という話題にもおよび、「他人から見たら散らかっているように見えても、本人の中では秩序がある」、「勝手に掃除されるとどこに何があるかわからなくなり、余計に困る」といった意見が出た一方で、「勝手に部屋を掃除されても気にならない。むしろ、ありがたい」という意見もあがりました。それらの意見を受けて子どもから、「大人は『自分の部屋は片づけない方が居心地がいい』と言うのに、どうして子供には『部屋をきれいにしろ』と言うのか」という質問が投げかけられ、大人たちは答えに困った様子でした。

「家事はみんなでやりましょう」、「お手伝いは率先してやりましょう」、「部屋はきれいに片づけましょう」という、いわば大人のシナリオに沿うのではなく、「そもそも、なぜ家事をやらなければならないのか」、「本当にやらなければいけないことなのか」、「なぜ部屋を片づける必要があるのか」、「何のために、誰がやるのか」というゼロから考える哲学対話の魅力を、参加者全員が実感した時間となりました。

江口講師は、「道徳の教科化に伴って必要とされる『議論する力』、『考える力』を養うために、『普段は考えないことについて、初めからじっくり考える』という哲学対話の場を、さらに広げていきたいと考えています。」と話しています。

